

「いじめる側にいる」という安心感は、自由を奪う

昨年いじめ問題が連日マスコミ報道されていた頃、朝日新聞にも各界の著名人の「いじめられている君へ」と、「いじている君へ」のメッセージが5段抜き記事で連載された。

今回、そのメッセージ集が冊子になり希望者へ抽選で配布されることを知り、応募したところ幸いに手に入った。

新聞連載時も毎日目にしていたが、改めて冊子を目にして、やはり自分は、「いじている君へ」の「その安心感は自由を奪う（精神科医：齋藤環）」のメッセージ（2 P に貼付）が最も印象に残る。

「雑学BN」掲載の「ノーの保障（随想等関係（I）P、1988.：参照）」に記載しているように、自由が保障されるとは、言い換えれば、「ノー」と云えることを保障されることだと日頃から思い、人間の尊厳にとって最も大事なことは「ノーと云える自由」ですよ。

さて、参考までに各著名人からのメッセージタイトルを列記しますので、目にしてみたい方のメッセージがありましたら、コピーしますよ。

《いじめられている君へ》

「すばらしい瞬間は必ず来る（あさのあつこ）」、「死なないで逃げて逃げて（鴻上尚史）」、「それでも話してみよう（林家正蔵）」、「世の終わりと思わないで（小柴昌俊）」、「自分支える足の声聞いて（高史明）」、「家族は最高の見方よ（横峯さくら）」、「『ひとり』になってもいい（華恵）」、「広い海に出てみよう（さかなクン）」、「人生は学校の外にも（野口健）」、「立ち向かわなくてもいい（松井秀喜）」、「自殺すること禁じます（石田衣良）」、「だれかに甘えていいよ（中村俊輔）」、「無理に変わらなくていい（川嶋あい）」、「違う出会いが待っている（鳥越俊太郎）」、「大きな夢が支えてくれる（松本零士）」。

《いじている君へ》

「嫌だって気持ちかっこいい（宮本亜門）」、「いじめられる自分想像して（ヨンニ）」、「友達傷つけず世界広げて（千住明）」、「大人のまねはしないで（むのたけじ）」、「昔の『ガキ大将』になって（高見のっぽ）」、「小さな世界出てごらん（野田知佑）」、「自分であやまる勇気もって（村田兆治）」、「苦しみに気づいてあげて（松本みよ子）」、「互いの気持ち考えよう（長州小力）」、「人を傷つけても後悔する（平野啓一郎）」、「できる方法で助けてあげて（増田明美）」、「大切な存在に気づいて（乙葉）」。

いじめている君へ



精神科医

斎藤 環さん

いま、だれかをいじめている君に伝えたいことがあります。

君は、ひよっとすると、家でつらい思いをしたり、以前に自分自身が

その安心感は自由を奪う

いじめられたりして、嫌な経験をしたことがないだろうか。

そのはけ口として自分より弱い相手や、すでにいじめられている友達に對していじめたいという気持ちになっていないだろうか。

私は、仕事で、そういう例をたくさん知っています。

君のような気持ちは、実は、特別なものではありません。その証拠に、いじめは大人たちの世界でもよくあることなのです。

だれかをいじめると、ときには気分がよくなってしまうことがあります。進んでだれかをいじめなくても、いじめる側にいると、自分が安心で

きる面もあります。

でも、人をいじめることで得られる安心感は、たしかなものではありません。それをやめると、今度は自分が、いじめられるかもしれないという怖さがあります。実際はひどく不自由な気持ちで暮らすことになります。

それは、大人の世界もまったく変わりません。だけど、君には、ここで立ち止まって考えてほしい。大人になっても、だれかを傷つけるような

人になりたいかどうか。

いじめを続けることで、失われるものがたしかにあります。自分自身が大切で、かけがえない人間であるという自覚が、いちばんに損なわれま

す。もし、それが大事だという感覚を失わずに、本当に自由な気持ちでいたいのであれば、どこかではっきりと気持ちを切り替えて、いじめをやめる勇気を持つことが絶対に必要です。

2006年11月15日朝刊